

館長だより 第14号(令和8年5月)

体験学習棟の躯体が建ち上がりました

風土記の丘のリニューアル工事は、昨年度末から建物の建設段階に入りました。最初に建設が始まった体験学習棟は、躯体が完成し、広場の方角からも樹林越しに建物がみえる状態になりました。まだ外構や付帯設備・内装の工事が続きますが、完成後は現資料館の改修中の一時的な事務所として利用し、その後は各種の体験学習を展開するための中心的な機能をもつ施設として活用していく予定です。

写真は万葉植物園の方角から撮影したもので、手前の建物が体験学習棟。その奥に見える現資料館のブルーシートの左側に新館（新博物館）が建つことになっており、現在はその基盤工事が始まっています。



他方、工事区域の仮囲いの奥（南西側）の方でも収蔵庫1棟の工事が進んでいます。こちらは県産材を利用した建物で、コンクリートの基礎の上に木材の骨組みが組みあがってきました。写真中の人と比べると、大体の大きさが想像できると思います。

博物館（新館）の3階にも収蔵庫が設けられますので、現在風土記の丘で保管している資料をこの2箇所に分けて収蔵・管理することになります。（写真は10日前に撮影）



博物館・資料館の収蔵庫に求められる機能

2つの収蔵庫を設けるのは、資料の性格や公開・展示との関係で扱いを分ける必要があるからです。新館3階の収蔵庫区画（借用品などを一時的に保管する部屋も含む）は、その手前にある部屋（収蔵庫前室）によって3階の他の部屋や通路と隔てられ、通路な

どの外部の空気が直接収蔵庫に流れ込まないように設計されています。収蔵庫に保管されている資料を展示する場合、資料を収蔵庫からまず収蔵庫前室に移動し、収蔵庫の扉を閉めてから前室の扉を開けて通路に出し、展示室に移動します。展示室から収蔵庫に戻す場合は、この逆の手順をとることになりますし、他の博物館施設などから借りてきた資料も同様の手順で一時保管室に収蔵します。こうした措置によって、外部の環境が収蔵室に直接に影響を与えないようにし、温湿度に代表される保管環境を厳密に維持管理することを可能にしているのです。これに対し、駐車場の奥に建てている収蔵庫は、そこまで徹底的な環境の管理をしません。

物体は時間とともに次第に劣化し、最終的にはその形を喪います。布や紙がボロボロになり、やがて粉状になったり、生命活動を終えた動植物のからだ時間が時間とともに消滅していくのは(死ぬことを「土にかえる」なんて言いましたよね)、その一つの形です。金属ですら錆によってボロボロになっていきますし、岩石も風化によって砂状になっていきます。ですから、資料の「保存」とは、その劣化を可能な限り緩慢にする作業であり、その基本が温湿度の変化によって素材そのものが劣化することを防ぐことです。それに加えて、燻蒸によって虫害やカビによる被害を防ぐなど、様々な方法がとられます。

風土記の丘が保管している資料は考古資料と民俗資料が大半ですので、それほど厳密に対応しなくてもと思われるかもしれませんが。確かに考古資料は土に埋まっていたり地表にころがっていたものが大半ですし、民俗資料も日常生活で使われていたものばかりです。それだけ本来は身近な資料と言えるものですが、やはり生活の歴史を考える資料として研究上も重要なものはしっかりとしたかたちで将来に残していきたいし、文化庁の国宝・重要文化財の保存・管理・公開についての基準も厳しさを増しています。

風土記の丘も大日山35号墳出土の多数の重要文化財指定の埴輪を保管していますし、今後も指定候補となっている出土遺物があります。それらの遺物を、他の機関が保管している岩橋千塚古墳群の出土遺物や、列島内の他地域の出土遺物と並べて展示することで(今までは現資料館の保管・展示環境が文化庁の認める基準に到達しておらず、他施設から国宝・重要文化財級の資料を借用して展示することができませんでした)、紀伊地域の古墳文化の特徴を県民の皆様それぞれに考えていただける機会を今まで以上に提供できることとなります。新館3階の収蔵庫は、そのための拠点収蔵庫になります。もちろん、重要文化財でなくても、展示の構成上の必要から高い頻度で活用する資料もありますし(本人たちには気の毒ですが、便利屋とも言えますし、どこでも仕事をするオールマイティな強者たちとも言えますが)、重要文化財と同じ遺構から出土した一括資料というべきものも、資料の一体性の観点から重要文化財とともに保管することが必要な場合もありますので、それらも新館3階の収蔵庫の収蔵対象になります。

それに対して、南西につくる収蔵庫は、収蔵環境の管理という点では、新館3階の収蔵庫よりも幾分緩やかな扱いをすることになります。収蔵・管理することで資料を次世代に継承するという目的は新館の収蔵庫と同じですが、どこが違うのでしょうか。

考古資料・民俗資料を本来の「身近な資料」として活用し、実物に触れることを通して歴史的な資料の面白さを感じてほしい、その経験を通して自分たちが生活している地域を見てほしい、それが風土記の丘の職員たちの願いです。今までも、ふどきっずやジュニア学芸員講座などで本物の資料に触れてもらい、その感触を通して生活の歴史を考えてもらう工夫をしてきました。

これほど多数の古墳の石室を公開しているサイトミュージアムは全国でもそうはありません。重要文化財・県指定文化財の民家を日常的に公開している点も同じです。紀伊風土記の丘は、実物に触れる機会を大切にしてきました。屋外の収蔵庫は、この基本的なポリシーに沿って、今まで積み重ねてきた経験を活かして、「触れる」ことも含めた積極的な活用を図ることを念頭に保存していく収蔵庫になります。

収蔵と保存の意味とは

博物館・資料館での「保存」は、多様な方法・手段で活用することを一つの目的とすることであること、そのために資料の「かたち」を可能な限り保存することが必要であることを述べました。しかしその意味での「保存」は、実は半分の意義しかありません。保存の過程で調査を行い、その資料の「現在のかたち」を可能な限り詳細に、可能な限り多様な手段で後世に伝えることがもう半分の作業です。物的な資料の保存と、資料に関する知見を提供すること、この2つを果たして初めて、将来の人々が使える良質な材料を残す作業が一段落します。だからこそ博物館や資料館は、資料を蒐集すること、それを研究すること、研究した知見をもって資料を公開活用すること、という3つの作業を責務とすることになるわけですし、このどれが欠けても機関としての活動は不十分との誹りを免れないのです。紀伊風土記の丘は、こうした基本的な責務を愚直に追求していきます。

近年は、博物館・資料館に対しても収支計算という経済的側面から議論されることが少なくありません。行政の様々な分野に投資効果的視点からの評価が入ってきている以上、その視点を否定するつもりはありませんが、文化施設の効果に関しては長い眼で見たいと思います。多くの方々に「もう一回行ってみよう」「(自分も子供のころに行ったので、今度は)子供を連れて行ってみよう」と思ってもらえる場所にしなければなりませんし、そのためには地道な努力の継続と、子供が大人になるような長い時間が必要になります。そして、そうなることを目指してどのような努力を続けていけるかが、県民からの評価として問われるところであると考えています。